

幼児の「うそ」の認識に関する研究

— 信用予期に話し手の特性が与える影響の検討 —

筑波大学大学院 (博) 心理学研究科 楯 誠

筑波大学心理学系 新井邦二郎

A study of preschoolers' cognition of lying: The effect of speaker trait on credibility predictions

Makoto Tate and Kunijiro Arai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study investigates the effect of speaker trait in episodes on children's credibility predictions for lying and truth-telling. Children were presented with one of four episodes. These episodes varied according to the trait of the story character (speaker), either good or liar, and whether they lied or told the truth to another character (listener) about a misdeed. After each episode, the children were asked whether or not the listener believed the speaker's statement and their reasons for that judgment. Eighty-seven preschoolers (mean age = 5 years, 11 months) participated in this study. The experiment has a 2 (speaker trait: good vs. liar) × 2 (statement: lie vs. truth) design. The preschoolers judged that lie statements were less credible than truth statements. Moreover, there was a tendency to judge the good speaker making a truth statement as being more credible than the other conditions. The results suggest that preschool children may be able to consider speaker traits in their credibility judgments.

Key words: preschooler, lying, credibility predictions, trait

問題と目的

子どもの「うそ」の認識についての研究は、心の理論研究において、人の心的状態についての子どもの知識・理解の発達が取り上げられるようになったことや、子どもが犯罪にまきこまれるケースの増加に伴い子どもの目撃証言・供述研究の重要性が上昇したことなどから、近年関心を集めてきている。

子どもの「うそ」の認識研究について大きな貢献を果たしたのは Piaget (1932 大伴訳, 1957) であり、彼は子ども達がどのような叙述を「うそ」として認識しているのか (定義判断)、そしてどのような叙述がより悪いと判断するのか (道徳判断) について研究を行った。そして子ども達は「うそ」の定義については、始めは客観的に正しいか否かによっ

てその叙述を「うそ」であるかどうか判断し、発達とともに話し手の意図や動機といった心的状態から判断するようになると明らかにした。また道徳判断においても、幼児などの年少児は叙述の事実からの逸脱の度合いや、叙述のもたらす結果から善悪の程度を判断するのに対し、10歳くらいになると話し手の意図や動機といったものから判断するようになることを指摘した。

Piaget (1932 大伴訳, 1957) 以降、「うそ」の認識について直接検討されることは半世紀ほど見られなくなったが、ここ20年において再評価がなされており (Bussey, 1992; Peterson, Peterson & Seeto, 1983; Wimmer, Gruber & Perner, 1984), Piaget の研究結果にいくつかの細かな修正がなされるようになってきている。また、言語学的知見から「うそ」

の認識の検討を行った研究 (Strichartz & Burton, 1990) や社会・文化的要因が「うそ」の認識に与える影響を考察した研究 (Lee, Cameron, Xu, Fu & Board, 1997), 様々なタイプの「うそ」の比較研究 (Bussey, 1999) など研究内容も多岐に渡っている。しかしながら, これらの研究において従属変数として取り上げられているものは多くが定義判断と道徳判断であり, それ以外の認識については感情的評価について検討したものがわずかにある程度で (Bussey, 1991, 1999), あまり見られない。

また, 「うそ」を始めとする誤った情報が他者の心的状態や行動に与える影響についての子どもの認識も, 心の理論研究領域において近年研究されるようになってきている (例えば Hala, Chandler & Fritz, 1991; Hala & Chandler, 1996; Sodian, Taylor, Harris & Perner, 1991 など)。これらの研究はまだ細かい点で一致した知見は得られていないが (楯・新井, 2002), 大体4歳前後において子どもは「うそ」などの誤った情報は他者の心的状態に誤信念 (False-Belief) を引き起こさせ, 他者はそれに基づいて誤った行動を取る, ということを認識出来るようになることが示されている。これらの研究においては, 誤った情報が他者に誤信念を引き起こすということを前提に行われている。しかしながら, より現実的な場面においては必ずしもそうなるとは限らない。「うそ」など誤った情報は, 他者に信じられて始めて誤信念を形成することが可能になり, より効果的・成功的な「うそ」をつつためには, 他者にその情報を信じてもらうということが極めて重要となる。誤った情報が他者に与える影響を推測するにあたり, その情報が他者に信じてもらえるのか, あるいは疑われるのかを考慮することも必要であると考えられる。実際場面において, 「うそ」はどのようなところから漏洩し疑われるのかについては, 社会心理学における虚偽検出・非言語的漏洩研究などによって多くの知見が得られている。しかしながら「うそ」が他者に信じてもらえるかどうかについての認識・推測を取り扱った研究はほとんど見られない。

子ども達は「うそ」というものを他者が信じてと認識しているのだろうか。心的状態を理解した上で「うそ」を意図的に使うようになるということは, 「うそ」がある目的を達成するために有用な手段であると理解している結果であり, その背景の1つには「うそ」を他者が信じてという認識があると考えられる。しかしながら, この認識について直接的に検討した研究は存在しない。そこで, 本研究においてはある情報を他者が信じてるか否かについての推測

判断を信用予期 (credibility predictions) と定義し, 「うそ」と「真実」の2つの叙述を聞いた他者がその情報を信じるか否かについて, 子ども達, 特に幼児はどのようにイメージするかを検討したいと思う。

また本研究においては, 信用予期に叙述の話し手の特性が与える影響を検討したい。イソップ童話の中に「狼と羊飼ひ」という有名な話がある。「狼が来たぞ」と「うそ」をつき続けた羊飼ひの少年は, 最後に本当に狼がやって来たことを告げた時, 誰にも信じてもらえなかったという内容であり, 「うそつき」は誰にも信じてもらえなくなるため「うそ」はついてはいけない, という訓話的要素を持つ話である。この童話に見られるような話し手の特性を考慮に入れた信用予期を, 子ども達は行おうのだろうか。そこで本研究においては話し手の特性として「うそつき」と「良い子」の2つを設定し, 話し手の特性が聞き手がその叙述を信じるか否かの判断にどのような影響を与えると子ども達は認識しているかを明らかにすることを目的とした。

方 法

被験者

茨城県内の保育所に通所する年長児87名 (男児41名, 女児46名, 平均5歳11ヶ月: 5歳4ヶ月~6歳6ヶ月) を対象とした。

課題

異なった特性を持つ話し手が, 聞き手に「うそ」や「真実」を伝えるエピソード課題を作成した。エピソードは特性要因 (「うそつき」, 「良い子」) ×叙述要因 (「うそ」, 「真実」) の計4つの条件を設定した。具体的には, 「うそつき」な特性を持つ話し手が「うそ」をつつ「うそつき」-「うそ」条件, 「うそつき」な特性を持つ話し手が「真実」を告げる「うそつき」-「真実」条件, 「良い子」な特性を持つ話し手が「うそ」をつつ「良い子」-「うそ」条件, 「良い子」な特性を持つ話し手が「真実」を告げる「良い子」-「真実」条件の4つである。また練習課題として, 明確な特性を持たない話し手が聞き手に「うそ」をつつエピソード課題を設定した。エピソード内容は Table 1 に示した。課題刺激として, A4版の紙に線画を彩色したものを各エピソード課題につき4枚, 男女別で8セット32枚及び練習課題用の刺激として男女別に各3枚の計38枚作成した。また, 課題刺激内の話し手の同定のために確認用のキャラクターカードを作成した。

Table 1 各条件におけるエピソード課題の内容

 <「良い子」－「真実」>

主人公は優しくとても良い子な男の子(女の子)です。ある時お友達がふざけて遊んでいて花瓶を割ってしまいました。主人公はそれを見ていました。しかし、先生は誰が花瓶を割ったのか知りません。そこで、先生は主人公に「誰が花瓶を割っちゃったのかの?」と聞きました。主人公は先生に「お友達が割っちゃったんだよ」と言いました。

<「良い子」－「うそ」>

主人公は優しくとても良い子な男の子(女の子)です。ある時お友達がふざけて遊んでいて花瓶を割ってしまいました。主人公はそれを見ていました。しかし、先生は誰が花瓶を割ったのか知りません。そこで、先生は主人公に「誰が花瓶を割っちゃったのかの?」と聞きました。主人公はお友達がかわいそうだったので「ほく(わたし)が割っちゃったんだよ」と言いました。

<「うそつき」－「真実」>

主人公はうそつきでとてもいじわるな男の子(女の子)です。ある時お友達がふざけて遊んでいて花瓶を割ってしまいました。主人公はそれを見ていました。しかし、先生は誰が花瓶を割ったのか知りません。そこで、先生は主人公に「誰が花瓶を割っちゃったのかの?」と聞きました。主人公は「お友達が割っちゃったんだよ」と言いました。

<「うそつき」－「うそ」>

主人公はうそつきでとてもいじわるな男の子(女の子)です。ある時主人公はふざけて遊んでいて花瓶を割ってしまいました。お友達はそれを見ていました。しかし、先生は誰が花瓶を割ったのか知りません。そこで、先生は主人公に「誰が花瓶を割っちゃったのかの?」と聞きました。主人公は怒られたくなかったので、「お友達が割っちゃったんだよ」と言いました。

エピソード内の「主人公」の部分は実施時は具体的な子どもの名称を取ったが、被験者の交友関係に無い名前を実施場所によって無作為に決定した。

手続き

幼児への面接調査は個別で行われた。エピソード課題はランダムに振り分けられ、練習課題、エピソード課題の順で提示された。練習課題及びエピソード課題は紙芝居形式で提示され、エピソード課題の提示後内容を把握しているかを確認するための理解質問が行われた。理解質問として1) キャラクターカードを用いた登場人物の同定、2) 話し手の特性理解(『○○君(ちゃん)は「うそつき」, それとも「良い子」?]), 3) 事実内容の把握(『花瓶を割ったのは誰?○○君(ちゃん), それともお友達?]), 4) 叙述内容(『○○君(ちゃん)は誰が花瓶を割ったって言った?○○君(ちゃん), それともお友達?]), 5) 聞き手の無知確認(『先生は誰が花瓶を割ったか知っている?それとも知らない?])の5つを設定した。理解質問のうち、1つでも通過できない質問があった場合には再度エピソードを教示しなおし、改めて通過できなかった理解質問を繰り返した。2回エピソード課題を教示したにもかかわらず、理解質問を全通過出来なかった者は後の分析から除外した。理解質問を全て通過したのを確認した後、『先生は誰が花瓶を割っていると思うかな?○○君(ちゃん), それともお友達?』(信用予期質問)と質問をし、さらに『どうしてそう思ったのかな?』と理由付けを尋ねた。なお練習課題においても話し手の特性理解質問を省く以外は

同様の手続きを行ったが、分析そのものの対象にはしなかった。

コーディング

(1) 信用予期質問のコーディング

被験者が回答した信用予期質問の内容を条件毎に分類し、聞き手(本課題においては先生)がある特性を持つ話し手の叙述を信じたか、信じていないかにコーディングした。話し手が報告した人物と同じ人物を、聞き手が花瓶を割った犯人であると思うと回答した場合は「信じる」、逆に話し手が報告した人物とは異なる人物を犯人だと思っている場合は「信じない」にコーディングした。具体的には「うそつき」－「うそ」, 「うそつき」－「真実」及び「良い子」－「真実」の3条件においては、聞き手が花瓶を割ったのが友達であると思っていると判断した場合「信じる」にコーディングし、話し手が割ったと思っていると判断した場合「信じない」にコーディングした。また、「良い子」－「うそ」条件においては話し手が割ったと思っていると判断した場合、「信じる」に、逆に友達が割ったと思っていると判断した場合は「信じない」にコーディングし、各条件ごとに集計した。

(2) 理由付けのカテゴリズ

信用予期質問の理由付けについては、以下の5つのカテゴリに分類した。①「叙述」(『〇〇君(ちゃん)がそう言ったから』), ②「特性」(『〇〇君(ちゃん)は「うそつき」(良い子)だから』), ③「事実」(『花瓶を割ったのは〇〇君(ちゃん)だから』), ④「その他」, ⑤「分からない」(無回答含む)。カテゴリズは心理学を専攻する大学生3名によって独立して分類され、一致率は87.1%であった。不一致なものについては協議の結果決定した。

結 果

エピソード課題の理解質問を全通過出来なかった17名を除外し、70名を分析の対象にした。

特性及び叙述内容が信用予期に与える効果

信用予期質問の回答についてコーディングによる分類をし、分析を行った(Table 2)。特性要因(「うそつき」, 「良い子」) × 叙述要因(「うそ」, 「真実」)について逆正弦変換法による二要因分散分析を行った。なお、各条件における被験者数が50に満たないため、Mosteller & Youtz (1961) のFreeman-Tukeyの逆正弦変換法を用いた。その結果、叙述要因において有意差が見られた($\chi^2=9.64$, $df=1$, $p<$.

Table 2 各条件における信用予期の内容

	「うそつき」		「良い子」	
	「うそ」	「真実」	「うそ」	「真実」
信じる	8	10	8	16
信じない	10	6	11	1
合計	18	16	19	17

数値は人数を表わす。

01)。話し手の叙述が正しければ聞き手はその情報は信じられ、叙述が誤り、「うそ」であればその情報は信じてもらえないと判断する幼児が多いということが明らかになった。また、交互作用について有意傾向が見られた($\chi^2=2.79$, $df=1$, $p<.10$)。単純効果について下位検定を行ったところ、叙述要因における特性要因の単純主効果を見ると、「うそ」条件においては有意差は見られなかったが、「真実」条件においては有意差が見られ($\chi^2=4.97$, $df=1$, $p<.05$)、「うそつき」は「良い子」に比べて信じてもらえないと判断する幼児が多い傾向を示していた。また、特性要因における叙述要因の単純主効果を見ると、「うそつき」条件においては有意差は見られなかったが、「良い子」条件においては有意差が見られ($\chi^2=11.40$, $df=1$, $p<.01$)、「うそ」よりも「真実」を叙述した方が信じてもらえると判断する幼児が多い傾向を示していた。幼児においては、「良い子」が真実を述べた場合は信じてもらえると多くの幼児は判断するが、叙述がうそである場合、あるいは特性が「うそつき」である場合は、信じてもらえると判断する幼児は減少する可能性が示された。

理由付けの分析

理由付けのカテゴリズの結果をTable 3に示した。5つにカテゴリズした信用予期質問の理由付けについて信用予期質問の回答毎(信じる, 信じない)に分類し、分析を行った。回答(信じる, 信じない) × カテゴリ(「叙述」, 「特性」, 「事実」, 「その他」, 「わからない」)の直接確率計算を行ったところ、有意差が見られ($p=.000$, 両側検定)、「信じる」と判断した場合と「信じない」と判断した場合にはその理由付けには違いが存在することが示された。回答毎に内容を見ると、「信じる」と判断した

Table 3 信用予期の理由づけの内容

	叙述	特性	事実	その他	わからない	合計	
「良い子」-「真実」	信じた	2	1	5	5	3	16
	信じない	0	0	0	1	0	1
「良い子」-「うそ」	信じた	5	0	0	2	1	8
	信じない	0	0	5	0	6	11
「うそつき」-「真実」	信じた	6	0	0	1	3	10
	信じない	0	5	0	0	1	6
「うそつき」-「うそ」	信じた	7	0	0	0	1	8
	信じない	0	5	2	1	2	10
合計	20	11	12	10	17	70	

数値は人数を表わす。

場合において、その理由付けとして「叙述」を挙げた者は1番多く、46.7%であった。逆に一番理由付けとして少なかったのは特性であり2.4%、「事実」も11.9%程度であった。「その他」と「分からない」はともに19%であった。逆に「信じない」と判断した場合は、「叙述」を理由付けにした者は1名もおらず、「特性」が一番多く35.7%、「事実」25%、「その他」が7.1%、「分からない」が32.1%であった。

考 察

本研究の結果より、話し手が「真実」を告げた場合と比較して、「うそ」を告げた場合には他者に明らかに信じてもらえないと判断する子どもが多くなるという結果が得られた。しかしながら、一方で40%以上の子どもが「うそ」の叙述についても他者に信じてもらえると認識していた。「うそ」条件、「真実」条件毎に信用予期について二項検定をしたところ、「真実」条件においては明らかに信じると推測したものが多かったのに対して、「うそ」条件については差異は見られなかった。以上から、幼児は全体的に“「真実」は信じてもらえる”と推測するが、対照的に「うそ」は信じられると推測する者と信じてもらえないと推測する者が大差なく存在することが明らかになり、“「うそ」は信じてもらえない”というような全体的な推測は見られないことが示された。

特性要因については有意差は見られなかったが、交互作用が有意傾向で見られ、「良い子」が「真実」を述べた時と比較して、叙述が「うそ」であったり、話し手が「うそつき」の場合は他者に信じてもらえると推測する幼児が少ない傾向が示された。このことから幼児は「羊飼いと狼」の童話に見られるような「うそつき」は真実を告げても信じてもらえないというような信用予期に特性がもたらす影響を部分的に考慮した認識している可能性が考えられる。このように、特性要因が信用予期に部分的にのみ影響を与えている理由として、第一に考えられるのは本研究における特性要因の伝達の仕方が考えられる。本研究においては特性要因として被験者に提示したのは教示文における「良い子」、「うそつき」といった表現と課題刺激の絵画図版に描かれた表情のみであった。また、教示文の「良い子」「うそつき」の特性の表現も、「優しくとても良い子」「うそつきでとてもいじわる」と2つの特性表現を用いている。そのため本研究の課題においては幼児は話し手の特性を十分に理解出来なかった、あるいはこちらの意図とは異なる理解の仕方をしてし

まった可能性が考えられる。

また、「うそつき」という特性に比べて「良い子」という特性は信用予期を推測する際にあまり影響を与えない情報である可能性が考えられる。理由付けについて見てみると、「信じる」と推測した者はその選択の理由に特性をほとんど用いなかった(36名中1名)のに対し、「信じない」と推測した者はその3分の1以上(34名中10名)が特性を用いた。さらに「信じない」と推測しその理由づけに特性を用いた幼児はすべて課題の特性要因が「うそつき」条件の子どもであり、「うそつきだから信じない」という判断はするが、「良い子だから信じる」という判断はほとんどなされることが推測された。これは、特性において「うそつき」という特性が「良い子」という特性よりも信用予期に与える影響が強い可能性が予測される。加えて、叙述要因において「真実」条件においては「うそつき」と「良い子」の間に差異が見られたのに対し、「うそ」条件においては見られなかった。このことから幼児においてはその話し手が「良い子」であるという認識よりも話し手が「うそ」をついたという認識の方が重要性が高く、「うそ」をついた子どもは「うそつき」であると特性の認識がすりかわってしまったため、特性要因による差異が見られなかったと考えられる。「良い子」-「真実」条件は他の3条件に比べる「信じる」と推測する幼児が多く見られるが(17人中16人)、これは要因の交互作用により「信じる」と推測する幼児が増えたと考えられるより、むしろこの状態が他者に何かを伝える際のデフォルトな信用予期の状態であり、これが「うそ」という叙述や「うそつき」という特性によって影響を受けたと考えた方がより妥当であろうと考えられる。特性要因については、より吟味した上でのさらなる検討が必要になると考えられる。

今後の課題として以下に3つほど述べる。本研究においては信用予期を直接的に「信じる、信じない」という言葉で聞かず、誰が花瓶を割ったという過失を行ったと聞き手が思っているかを尋ね、そこから信用予期を導き出している。そのため、厳密な意味での信用予期を聞いているとは言いがたい。「真実」が信じられるという推測において、それは「友達花瓶を割った」という話し手の叙述に着目したのか、単に友人が花瓶を割ったという事実に着目したのかを明らかにすることが出来ず、叙述を信じたから聞き手は友達花瓶を割ったと思うと推測した場合と、叙述は関係無く実際に花瓶を割ったのは友達だから友達が犯人だと思うと推測した場合が混同してしまっているという問題がある。「信じる」と

推測した者の中でその理由づけに叙述を挙げた者は全体の半数近くに対して、事実を述べた者は10%程度であり、明らかに叙述から推測している幼児が多く見られた。しかし、一方で「分からない」及び「その他」にカテゴライズされる者が40%近くいるため、「信じる」と推測した者の多くが叙述から推測したとは言い切れない。そのため、今後の課題としては信用予期をより適切に聞く手段を検討する必要があるだろう。本研究の手段は、「信じる」という心的動詞を理解出来るようになるのは7歳以降であると指摘する Abbeduto & Rosenberg (1985) の知見を鑑みて取られたが、改めて直接「信じる、信じない」と聞く手段も検討の余地に加えてより良い手段を考える必要があるだろう。

また、本研究は幼児を対象に実施されたが、年長児1学年に限定されており、その発達の変化は明らかにされていない。信用予期及びそれに特性の及ぼす影響が、加齢によりどのように変化するのかを明らかにすることは重要であると考えられる。加えて、本研究においては「うそ」を告げる・真実を告げるという2つの叙述形態について検討したが、それ以外の叙述形態についても調べる必要があると思われる。Wimmer, Gruber & Perner (1984) は、「うそ」の定義と道徳判断研究において、「うそ」と「真実」の叙述形態以外に「真実」を告げようと思いついて誤って間違っただけを言ってしまう言い間違いや「うそ」を言おうとして間違っただけで「真実」を告げてしまう「うそ」の失敗についても検討している。これら「うそ」と「真実」の中間に存在する叙述形態についても信用予期について検討することは子どもの「うそ」の認識をより深く知る上で有益であると考えられる。

引用文献

Abbeduto, L. & Rosenberg, S. 1985 Children's knowledge of the presuppositions of know and other cognitive verbs. *Journal of Child Language*, 12, 621-641.

Bussey, K. 1992 Lying and Truthfulness: Children's definitions, standards, and evaluative reac-

tions. *Child Development*, 63, 129-137.

Bussey, K. 1999 Children's categorization and evaluation of different types of lies and truths. *Child Development*, 70, 1338-1347.

Hala, S., Chandler, M. & Fritz, A.S. 1991 Fledgling theory of mind: deception as a marker of the three years old's understanding. *Child Development*, 62, 83-97.

Hala, S. & Chandler, M. 1996 The role of strategic planning in accessing false-belief understanding. *Child Development*, 67, 2948-2966.

Lee, K., Cameron, C.A., Xu, F., Fu, G. & Board, J. 1997 Chinese and Canadian children's evaluation of lying and truth telling: Similarities and differences in the context of pro- and antisocial behavior. *Child Development*, 68, 924-934.

Mosteller, F. & Youtz, C. 1961 Tables of Freeman-tukey transformations for the binomial and poisson distributions. *Biometrika*, 48, 433-440.

Peterson, C.C., Peterson, J.M. & Seeto, D. 1983 Developmental Changes in Ideas about Lying. *Child Development*, 54, 1529-1535.

ピアジェ J. 大伴茂 (訳) 1957 ピアジェ児童臨床心理学Ⅲ 児童道徳判断の発達 同文書院. (Piaget, J. 1932 *Le Judgement moral chez l'enfant*. Geneve: Institut J.J. Rousseau.)

Sodian, B., Taylor, C., Harris, P.L. & Perner, J. 1991 Early deception and then children's theory of mind: False trails and genuine markers. *Child Development*, 61, 211-220.

Strichartz, A.F. & Burton, R.V. 1990 Lies and truth: A study of the development of the concept. *Child Development*, 61, 211-220.

楯 誠・新井邦二郎 2002 幼児の「あざむき」研究の概観 筑波大学心理学研究, 24, 227-235.

Wimmer, H., Gruber, S. & Perner, J. 1984 Young children's conception of lying: Lexical realism-Moral subjectivism. *Journal of Experimental Child Psychology*, 37, 1-30.

(受稿10月4日: 受理11月13日)